

はしがき

本書の目的は、戦後日本社会における歴史研究と社会運動の重なりから、在日朝鮮人および日本人市民の実践の軌跡に焦点を当て、その意義を跡付けることにある。

「戦後日本」とは何か。太平洋戦争末期、各地で繰り広げられた激しい空襲や広島・長崎への原子爆弾の投下、そして敗戦。焼け野原となった国土で、全てを失った中からたくましく立ち上がり復興を担った人々、民主主義国家としての再出発、そして「もはや戦後ではない」と言わしめた高度経済成長のもたらす豊かさの実現。荒廃から復興へと続く「戦後日本」の物語は紡がれ、共有されてきた。

では「戦後日本」の社会とは、「日本人」のみによって生きられた時空間なのか。そうでないことは明白である。なぜなら、「戦後日本」に先立って存在していたのは、「帝国日本」だからである。対外的な膨張を続けた近代日本は、朝鮮や台湾、南洋諸島などの「外地」を植民地として次々と獲得していった。その過程では、植民地朝鮮や台湾の出身者、先住民族のアイヌ、琉球民族など、多様な歴史的文化的背景を持つ人々が、「大日本帝国」の名の下に「臣民」の範疇へと組み込まれていった。

日本の敗戦は、それに伴う領土の再編と、「日本人」の枠組みの見直しへと繋がる。「帝国日本」が解体される中で、「日本人」とされてきたこれらの人々は、いうまでもなく日本の地域社会で多くの日本人と共に日常を営み、そしてそれぞれの立場から「戦後日本」を経験した。だが、彼らの存在と、その運命を力ずくで変えていった暴力的な力学は、「日本人」による戦後の国家再建と繁栄の物語からいつしかこぼれ落ちていく。裏を返せば、こうした人々の存在に光を当てずして、「戦後日本」の歩みを明らかにすることはできないだろう。

そこで本書は、戦後日本社会の多様性や重層性を解きほぐす手がかりとして、在日朝鮮人^{〔1〕}および彼らと関わった日本人の視点から見ていく。とりわけ、これまで日朝関係史の研究において顕著な功績を残してきた在日朝鮮人の「歴史家」という存在に着目する。言うなれば在日朝鮮人とは、近代日本の朝鮮半島に対する植民地支配を契機に生まれた歴史的存在である。だがその歩みは、植民地解放後も冷戦体制下で、日本・韓国・北朝鮮という三つの国家の狭間に置かれた一方で、いずれの国家の「歴史」においても周縁化されてきた。そうであるがゆえに、日本社会に生きた在日朝鮮人歴史家たちにとって、日本と朝鮮半島をめぐる「歴史」を描くことは、祖国の植民地化と過酷な民族差別を生み出した過去の告発であり、現在も自分たちを不可視な存在へ押しやろうとする社会への抗いであり、さらに未来の世代に在日朝鮮人という存在の証明と誇りを繋ぐための祈りであった。そして、様々な場面を通じて彼らと関わり、その問いかけを受け止め、連帯の声を上げた多くの日本人がいた。本書は、そうした歴史をめぐる多様な人々の実践——歴史実践——の軌跡を通じて、日本の戦後史の新たな一面を描くことを目論んでいる。

とはいえ、日本の「戦後」は長い。在日朝鮮人社会も既に「百年史」を有するようになった今、一口に歴史家といっても、膨大な人々の活動や実践を余さず捉えることは難しい。さしあたって本書では、一人の在日朝鮮人歴史家を主人公に据え、その活動が精力的に展開した一九七〇年代から九〇年代にかけての時間軸を中心に見ていきたい。その歴史家の名は辛基秀（シン・ギス）（一九三二～二〇〇二）という。

人やモノ、情報の自由な往来があつて初めて国際交流が成り立つとすれば、一九七〇年代年当時の日本と朝鮮半島は文字通りの「近くて遠い国」であつた。焼け野原の「敗戦」から三四年。高度経済成長は翳り、二度にわたるオイルショックを経ながらも、産業構造の転換や円安ドル高を背景にした輸出の増大を受け、日本は後のバブル経済に繋がる安定成長期を迎えていた。一方、同時期の韓国は政治的経済的な動乱の最中であつた。一九六一年のクーデターにより政権を奪取した朴正熙^{（パク・チンヒ）}大統領は、疲弊した経済の立て直しを目的に、かつて韓国を植民地とした日本との国交正常化を強引に推し進めた。一九七二年には憲法の停止、国会解散、戒厳令の布告を次々と行い、大統領の権限を大幅に強化する維新憲法を公布した。この「維新体制」下で重化学工業化が進められたが、オイル

シヨックはそうした経済政策に少なからぬ打撃を与えた。また、北朝鮮との関係が著しく悪化する中で、政権は国内の思想・言論・表現の自由を制限し、野党政治家をはじめ、軍事独裁政権に反対する知識人や学生、メディアを厳しく弾圧し、多くの犠牲を出した。一九七九年一〇月二六日に朴正熙は側近である中央情報部部長に暗殺され、一八年続いた軍事独裁政権が終わりを告げる。ただし、「ソウルの春」を喜んだのも束の間、再びクーデターで政権を掌握した全斗煥チョンドフワンにより、新たな軍事独裁政治が始まることとなる。

第二次オイルシヨックの年であり、朴正熙暗殺から遡ること約八カ月の一九七九年二月、辛基秀が制作した歴史ドキュメンタリー映画が完成した。タイトルは『江戸時代の朝鮮通信使』。後述するように、朝鮮通信使（以下、通信使）とは、近世の日本と朝鮮半島を往来した外交使節を指す。辛基秀の代表作となったこの映画は、日本各地でのフィールドワークと文献資料を通じ、豊かな国際文化交流の視点から通信使を描いた。わずか五〇分ほどのカラーフィルムながら、三月に大阪市内で初めて上映され、会場には約六〇〇人も観客が集った。その後も多くの市民の手によってフィルムは受け渡され、日本各地で上映会が開かれていく。その際、岐阜市内で開催された上映会に寄せ、地元出身の吉田欣一が次のようなメッセージ文を寄せた。吉田は、六〇年代のベトナム反戦運動にも参加し、『春先の風』などの作品で朝鮮人への共感を描いたプロレタリア詩人であった。

『江戸時代の朝鮮通信使』と云う歴史ドキュメンタリーフィルムに接して、眼を洗われるような感銘を受けた。大垣市竹島町に今も残る朝鮮軸に乗せていた『朝鮮王』の装束等の『朝鮮通信使』の史跡を見るにつけ、それは朝鮮と日本との友好と云うことだけではなくて歴史観に新しい何物かを加えてくれた。：

映画『江戸時代の朝鮮通信使』は私にとって、あなたにとって、その生き方に何かを加えるものがあるように私は信じている。

（映像文化協会編一九七九・二二二）

「生き方」に関わる「歴史」とは一体どのようなものだろうか。「韓国」や「朝鮮」という語に対し、多くの日本

人がまだ戦前の植民地の記憶や、あるいは韓国の軍事独裁政権から連想する暗く否定的なイメージを寄せていた同時期にあつて、近世の日朝交流史を謳う通信使はひどく牧歌的なテーマにも思える。だが、この吉田が寄せたメッセージには、そうした「近くて遠い」隣国との友好を語りつつ、さらに自身の内面が揺るがされるような深い感慨が込められているようにも読める。辛基秀とは何者で、なぜこの映画を作ったのか。どんな人々が、なぜこの映画に関心を寄せ、何を観たのか。人々の生き方に「新しい何物か」をもたらした「通信使」とは何なのか。本書の問いはここから始まる。

注

(1) 本書における在日朝鮮人とは、日本の韓国併合を背景に渡日した朝鮮人およびその子孫たちを指す。したがって、引用文中の表記等を除き、韓国・朝鮮籍、日本籍、その他の国籍にかかわらず「在日朝鮮人」として表記する。呼称としては「在日朝鮮人」「在日韓国・朝鮮人」「在日コリアン」などが一般に使われている。また、在日朝鮮人を世代ごとに表現する際には、「〳世」と表記する。さらに、朝鮮半島全体を地域として指す場合は「朝鮮」を使用し、朝鮮由来の言語や文化は「朝鮮語」「朝鮮文化」などと表記する。また、一九四八年に成立した「大韓民国」および「朝鮮民主主義人民共和国」については、それぞれ「韓国」「北朝鮮」という略称を用いる。